

教育史跡・教育文化遺産探訪

—近世3人の聖人とその私塾—



安原 義仁 (S46 教
S49 教修)

現 住 所 広島市
現 職 広島大学名誉教授
前 職 広島大学附属小・中・高等学校校長
放送大学特任教授(広島学習セン
ター所長)

はじめに
—教育文化遺産とは—

去る平成31(2019)年5月、文化審議会において、文部科学大臣に対し長野県松本市の「旧開智学校校舎」を国宝に指定するとの答申がなされた。答申が認められれば近代学校建築として初の国宝指定となる。近世の学校建築としては岡山県備前市の閑谷学校講堂が国宝に指定されており、教育文化遺産に光が当てられてその保存・継承の気運が高まっていくことは喜ばしいかぎりである。近年、「世界遺産」、「日本遺産」などをたずねる観光旅行がブームとなり、多くの人々が遺産に指定された自然・景観や史跡や文化財を

訪れている。実際にその地に立つて直接遺産をまのあたりにすることは、これまで人類が営々として築き上げてきた文化・文明に思いをいたし、現在を見つめ未来を志向する何よりの機会となろう。

さまざまな文化遺産がある中で、「教育文化遺産」というべきものもある。「教育」という営み、もしくは文化活動にかかわる歴史的な所産で、具体的には教育活動にかかわるの教材・教具や教室を含む学舎、教育活動に携わった人々の事績を具体的に伝えるものなどである。世界遺産ではスペインの「アルカラ・デ・エナレスの大学と歴史地区」(1998年登録)やポルトガルの大学都市「コインブラ」アルタとソ

フィアー」(2013年登録)などがある一例であり、日本遺産では「近世日本の教育遺産群—学びの心と礼節の本源—」(2017年登録、第1号)がそれに該当しよう。

日本修学旅行協会は「教育文化遺産をたずねる」山川出版社、2012年において、足利学校や咸宜園や適塾など計40件をとりあげ、訪問する際のガイド・手引きとしているが、それ以外にも全国各地には数多くの教育文化遺産が来訪者を待っている。

私がそれらの遺産を訪ねる旅に出かけるようになったのは広島大学を定年退職して放送大学特任教授(広島学習センター所長)を務めていた頃のことである。そして、放送大学退任後にそのペースは速くなり、意図して探訪の旅を楽しむようになった。それは格好の私の生涯学習のテーマとなった。

私はこれまで長い間、イギリスの教育史・大学史を専門に研究生活を送ってきた。また放送大学時代には、その延長線上に「大学」誕生以前の「学問の府」の起源を探求する壮大な試みにイギリスのロイ・ロウ教授とともに挑戦し、古代の地中海世界やインド、中国、イスラーム社会などに存在した「学問の府」について鳥瞰図を描いてみた(ロイ・ロウ、安原義仁「学問の府」

の起源—知のネットワークと「大学」の形成—」知泉書館、2018年)。それは自分の研究をより大きな枠組みの中に位置づけたいという意図から出たものであった。その海外への冒険旅行が終わってみると、今度は足元の日本国内への旅が俄然私の興味・関心を惹きつけるようになっていた。自分はイギリスの教育史・大学史を専門としてきたが、日本それについてはほとんど何も知らないではないか。現代日本に生きる者として外国の文化・歴史を研究する意味はどこにあるのか。あらためて日本の教育・文化の歴史を振り返り、そのことを通じて自らのアイデンティティを確認したい。私の「日本回帰」には多分、足元を見つめなおす「脚下照顧」の思いもあるのだろう。

私の日本の教育文化遺産・教育史跡探訪の旅はこうして始まった。訪ねたいところは数多くあるし、かつて訪れたところもあった。訪問先の選択は体系的ではなく、その時々々の気分や都合・状況によった。教育文化遺産の類型としては時代別の区分もあるし、また、官学、私学、文庫、寺院、藩校、郷学、私塾といったカテゴリーもある。そうした中から私はこれまでに大学寮、大宰府府学、綜芸種智院、足利学校、安土セ

ミナリオ、湯島聖堂（昌平坂学問所）、閑谷学校、神辺廉塾、佐倉順天堂、津山洋学館、適塾、懷徳堂、萩明倫館、松下村塾、近江兄弟社学園などの故地を訪ねて見聞を広め、温故知新の想いを新たにしたい。

旅のスタイルは自分流である。最寄りの駅まで公共交通機関で行って、そこから地図を片手にレンタサイクルで町中を走り、目的の記念館等を見学し近辺を歩き回って目に留まった風物や史跡・遺産を写真におさめる。そして、パンフレットや資料を収集し、記念品を入手して帰途に就く、といった具合である。そして帰宅後、知識・情報や写真を整理し、関連文献にあたって復習・確認し、実際の見聞と重ね合わせながら私なりに教育・文化についてあれこれ思いを巡らす。これが私の老後の楽しみ生涯学習のテーマとなった。

I 近世私塾の種類と特色

本稿では、私の教育文化遺産・教育史跡探訪のうち、近世3人の聖人（いずれも儒学者で陽明学に傾倒）とその私塾について紹介することにした。すなわち、中江藤樹の藤樹書院、山田方谷の牛麓舎・長瀬塾・小阪部塾、池田草庵の立誠舎・青陰書院であり、いずれも類型としては

近世私塾にあたる。

私塾は16世紀末の慶長年間に始まり、江戸時代を通じ全国に普及したが、とくに18世紀末から19世紀中葉にかけて（寛政期から安政期）数多く開設された。武芸塾や宗乗関係の大半のものを除いた学問塾だけで総計1493校を数えたという。それは明らかに庶民の基礎教育の場である寺子屋の普及・発達と呼応したものであった。読み・書き・算の基礎教育以上のさらなる高度な教育への庶民の要求・向学心がその背景にあった。

私塾は「有志者の好まないし自発性に基づいて開設された自然発生的な教育機関」であり、その種類はきわめて多彩であった。剣・槍・弓・馬・砲術などを教授する武芸塾もあり、学問塾では国学塾、蘭学塾、洋学塾などもあったが、その大多数を占めたもつとも一般的なものは漢学塾であった。私塾は幕府や藩当局の統制をうけないインフォーマルな教育の場であり、そこでは教師と弟子の親密な人間関係を中心に個性的な教育が展開された。教育内容や教授方法、教育水準なども一定ではなかった。その社会的役割・機能は、幕府の昌平坂学問所（昌平黌）や藩校の発展状況に依じて、それを代替したり、あるいは補完したりするも

のとなったが、さらに、とくに幕末期には、既存の学校に対抗するものともなった。私塾はもちろん身分秩序の厳しい封建体制下における活動を展開したわけだが、身分の枠に捉われず士分と庶民がともに学ぶ「士庶共学」を実現したこと、また、封建的割拠主義をこえて全国各地から多くの生徒を集めたことは、その大きな特色として挙げられる。

中江藤樹、山田方谷、池田草庵はそれぞれ、近江聖人、備中聖人、但馬聖人と呼ばれる儒学者で、その人と思や業績は専門家や関係者の間では広く知られている。ちなみに、岩波書店の「日本思想体系」全67巻において、中江藤樹は1巻を与えられており（山井 湧・山下龍二他編『中江藤樹』1974年）、池田草庵の著作の一つは中村幸彦・岡田武彦編『近世後期儒家集』1972年に細井平洲、中井竹山、広瀬淡窓などのそれとともに収録されている（山田方谷は同思想体系では取り挙げられていない）。彼らが主宰した私塾についてもある程度知られているようが、私にはほとんど未知の新鮮な学習経験であった。本稿は上記3人の聖人たちとその漢学塾について、実地の見聞に基づく紀行・観察記である。

II 中江藤樹と藤樹書院

日本陽明学の始祖とされ、没後、幾多の徳行によって近江聖人と讃仰された中江藤樹は慶長13（1608）年、近江国高島郡小川村に農民の長男として生まれた（いみなは原、通称は与右衛門）。生家には藤の大木があり、号の藤樹はこれに由来する。数え年9歳の時（1616年）に伯耆国米子藩主加藤貞泰の家臣であった祖父吉長の養子となり米子に移住、さらに藩主の伊予国大洲への転封により翌年大洲へと移った。その頃から「庭訓往来」や「貞永式目」を習い初め、さらに「大学」を読んで学問（儒学）の道を志した。その一方、武芸にも励み、また曹溪院の天梁和尚について詩や書も学んだ。17歳の時（1624年）に、京都から来訪した禅僧から初めて「論語」の講義を聴いたのを契機に儒学に傾倒し、『四書大全』を反復・熟読する。大洲藩士としての務めの傍ら同輩や門弟たちに「大学」の講義をしたり、『大学啓蒙』などの著作を著したりして儒学者として研鑽を積んでいたが、27歳（1634年）の時に脱藩帰郷して禄を離れ、酒売りと米貸しで暮らしをたてるようになる。郷里に一人残された老母に孝養を尽くすためと病弱ゆえであり、

辞職願が藩に受け入れられなかったゆえの決断であった。ただし、これは表向きの理由で、本当の理由は他にあったともいう。



中江藤樹座像（木像）

30歳の時に結婚したが、その頃から藤樹に教えを乞う近郷の村人や大洲からの武士たちが増え、彼らから「藤樹先生」と呼ばれ親しまれるようになった。藤樹は居宅地に会所を建てて私塾となし、「藤樹規」や「学舎座右戒」を作成してその運営と門弟の教育に尽力した。それは創世期の私塾の一つとなった。以後、終生、この「藤樹書院」と呼ばれた居宅の書院で講義や著作の執筆に専念し、人々の教化・啓蒙活動に従事した。亡くなったのは慶安元（1648）年、41歳の生涯であった。

「村民の之（藤樹）を尊信すること神の如く」であったとされるその死去に際しては「郷里郷党皆涕泣して柩を送る。其の状恰も親戚を喪するが如し」だったという。

藤樹はほぼ「独学の人」であった。藤樹が最初に学んだ儒学は朱子学であったが、やがて王陽明の陽明学に傾倒した。そして「愛敬」（命をうけた父母や先祖や大自然を敬うこと）、「五事（貌言視聽思）を正す」（顔つき、言葉づかい、まなざしに心を配って人の話をよく聞き、相手を思いやる）、「致良知」（天から授かった人が誰でも持っている美しい心を磨いて曇らさないこと）を説いて人々を教え導いた。陽明学は「知行合一」を標榜して実践・行為を重視するが、その意味するところは知識と行動を一致させることが大事だということとどまらず、深く真理を認識した人間はその真理にしたがって行動せざるをえなくなる、という点にあった。藤樹の思想は『大同学啓蒙』、『翁問答』、『鑑草』などの著作にまとめられて後世に伝えられている。

藤樹は書院の壁に「藤樹規」を掲げて、門人たちに次の6条からなる学ぶ際の心得を示していた。

一、大学の道は、明德を明らかにするに在り。民を親しむに在り。

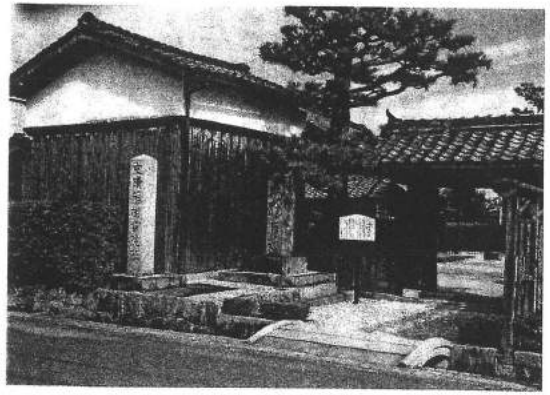
- 一、天命を畏れ、徳性を尊ぶ。
- 一、博く之を学び、審らかに之を問ひ、慎んで之を思い、明に之を弁じ、篤く之を行う。
- 一、言うに忠信、行うに篤敬。念を懲らし、欲を塞ぎ、善に遷り過を改む。
- 一、其の義を正して、其の利を謀らず。其の道を明らかにして、其の功を計らず。
- 一、己の欲せざる所、人に施すことなかれ。行つて得ざること有れば、諸を己に反り求めよ。



藤樹規

藤樹書院に学んだ人々の人数はどれ程だったのか、どのような人々がそこに集まったのかだろうか。藤樹は近郷の村人および大洲藩などからやっていた武士たちなど身分を問わず教えを説いており、師弟関係を結んだ門人の他にいわば聴講生のような者もいたであろうから、書院に学んだ人々の人数やプロフィールを特定することは難しいが、藤樹書院の建物の規模からしても、こぢんまりとした集まりであったと推測される。後のいくつかの私塾に見られるような「入門帳」の類も藤樹書院には残されていないようである。

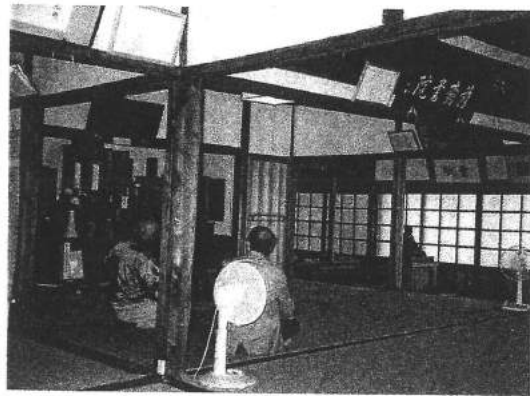
遠方から来塾した学生が書院で寄宿生活を行ったのかどうかも定かではないし、学生が束脩のようなものを納めたのかなど塾の財政や経営についても明らかではない点が多々ある。一方、藤樹の学者・教師としての指導ぶりについては、愚昧の大野了佐（大洲藩時代の同僚の子弟）に対する懇切丁寧で根気強い医書解説指導や、正直者の馬方又左衛門（藤樹の教えを守って、客の飛脚が馬の鞍に置き忘れた200両の大金をわざわざ返しに行き礼金も受け取ろうとしなかった）などの逸話によって広く知られている。



藤樹書院（入口門）

藤樹書院に学んだ著名な門人・学者としては熊沢蕃山（備前岡山藩主池田光政の補佐役として重用され、藩政改革に取り組む）、淵 岡山（仙台藩士で、後に京都に学館を開きそこで多くの弟子を育成）、中川謙叔（大洲藩士の子で岡山藩主池田光政に仕え、郷校閑谷学校で教える）などがいる。その流れは後に藤樹学派（江西学派）を形成した。近世儒学は藤原惺窩を祖とし、林羅山に始まる朱子学が封建的秩序の指導理念・幕府の御用学問とされて展開されていくが、そうした中で藤樹は朱子学から出発しつつ、やがて陽明学に傾倒していった。湯島聖堂・昌平坂学問所（昌平黌）へと発展するいわば官学の林家朱子学に対し、批

判精神に富む在野の陽明学の私塾、それが藤樹書院であった。



藤樹書院（内部）

中江藤樹と藤樹書院にゆかりがある遺蹟・遺産には、滋賀県高島市安曇川町に藤樹書院跡（国史跡）、王林寺の墓所（儒葬墓、国史跡）、熊沢番山寓居跡、馬方又左衛門宅跡などがあり、また藤樹神社（大正11（1922）年創立）、中江藤樹記念館（昭和61（1986）年建設）、陽明園（王陽明の生地である浙江省余姚市との友好記念庭園、平成4（1992）年開園）などの顕彰・啓蒙・研究のための施設も設けられている。全国的には昭和7（1932）年に藤樹頌徳会（広島文理科大学教授・文学博士西晋一郎が会長）が発足しており、後に藤樹学会と名

称を変えて活動を継続している。町には藤樹の幼名を冠した「よえもんさん通り」と「藤かげの道」も整備され、道に沿ってあちこちに藤樹の言葉や逸話についての説明版や像が設置されている。現在、人口約48,000人を数える高島市は郷土が誇る近江聖人中江藤樹を町おこしの一環としても位置づけ、そのための方策を展開している。地元の方でNPO法人高島藤樹会も種々の地道な活動を行っている。

私が安曇川を訪ねたのは平成30（2018）年10月2日であった。陽明園を見て回っている時、60歳前後のスーツ姿の紳士から「あなたも漢学を学んでおられるのですか」と話しかけられた。聞けば福島から関西方面への出張の機会に足をのばして安曇川を訪れたとのことであった。藤樹ゆかりの地をレンタサイクルで巡り歩き、目に映じた風物をカメラに収めた後、私は良知館（藤樹書院案内・休憩施設）で「藤樹規」の複製と「致良知」と書かれた藤樹扇を記念の品として購入し帰路に就いた。

Ⅲ 山田方谷と牛麓舎・長瀬塾・

刑部塾

藤樹書院が寛永15（1638）年

頃開設された最初の私塾の一つであったのに対して、山田方谷が自宅に開いた家塾牛麓舎は、その200年後の天保9（1838）年に発足した。幕末期に全国各地に数多く誕生した漢学塾の一つである。山田方谷は文化2（1805）年、備前中山藩領阿賀群西方村に農業と菜種油の製造販売を営む家の長男として生まれた（いみなは球、幼名阿隣、通称安五郎）。親の期待を担って5歳で親元を離れ、新見の藩儒丸川松隠（大坂の中井竹山の門下。尾藤二州、古賀精里、頼春水らと親交を結んだ）について学び始めた。幼少時に「何のために学問をするのか」と聞かれて「治国平天下」と答え、奉納額に「天下太平 国土安全」と揮毫して周囲を驚かせたという逸話もある。だが、両親の相次ぐ死により帰郷して家業を継ぐこととなったのはやむを得ないことであった（師の松隠はそのことを惜しんだ）。若き日の方谷（安五郎）は父の遺訓12条をよく守って新婚の妻とともに家業に励み、近隣の村人たちとも誠実に交わったが（このことを通して庶民の暮らしの実情に通じるようになった）、そのかたわら学問への精励を怠らなかつた。その姿が藩主板倉勝職に聴こえて二人扶持を与えられ（士分への取り立て）、藩校有終館

で学ぶこととなった。21歳の時であ



山田方谷 (肖像画)

さらに、方谷は三度にわたり藩費で京都に遊学し、丸川松隱の学友である寺島白鹿の門に入って朱子学を学んだ。最初と二度目の遊学はそれぞれ23歳、25歳の時で遊学期間は半年ほどであった。最初の遊学時には学業はあまり進まず、その苦悩もあって蘭溪禅師のもとをたびたび訪ねて禅の修行もした。二度目の遊学から帰藩した時には有終館の会頭(教授)に任じられている。27歳の時の三度目の遊学は2年間の長期にわたり、この間、鈴木遺音の塾にも出入りし、春日潜庵など多くの学者たちと交友を結んだ。王陽明の『傳習録』を読んで陽明学を知ったのもこの頃(29歳)のことである。そして、方谷はさらに3年間の江戸遊学を許可されて、「陽朱陰王」と言われた幕府の儒官佐藤一斎の家塾に入

門し、朱子学とともに陽明学を深く学ぶこととなった。洋学を重視する同門の佐久間象山と日夜激論を交わしたのはこの間のことである。その学識・人格を認められて一斎の家塾では塾頭も務めた。江戸を去るに際して一斎から「盡己」(わが誠をつくす)と大書した書を贈られて、誠意・誠実こそ学問や行為の基であることを胸に刻んだ。方谷はこのことを「至誠惻怛」(誠意を尽くし人を思いやる心)という言葉で表現し、折に触れて門弟たちに説いた。この言葉は、王陽明の書中の言葉を基にしたもので、方谷に教えを乞うためやってきた越後長岡藩士河井継之助に贈った「至誠惻怛 以って 万物一体の仁を全うす」に由来するとい

う。江戸から帰藩した方谷は有終館学頭(校長)を命じられ、城下に邸宅を賜ったが、彼は有終館学頭としての活動のかたわら臥牛山の山麓にあった邸宅に家塾「牛麓舎」を開き、そこで約13年間にわたって志の高い藩士や他郷から来訪した塾生たちを教えた。常に数十人がそこで学んでいたという。牛麓舎では塾規に「立志・勵行・遊芸」の三条が学問習得の理念として掲げられ、志を立て、熱心に学び、教養を身につけて詩文を楽しむことを奨励していた。

後に藩政改革に深く関わるわけだが、この頃の方谷が門弟に対し、学問の目的として「遊芸」(純粹に学芸・詩文の世界に遊ぶこと)を示していたことは興味深い。専一に学べということであったろうか。共同生活をおくるうえでの規則も厳しく定められていた。牛麓舎から巣だった主な門弟には、後に藩の筆頭家老となり戊辰戦争に際して無血開城の責任者・鎮撫使(岡山藩)への謝罪使正使をつとめた大石隼雄、老中となった藩主板倉勝静の顧問を務めた三島中州(有終館学頭でもあった)、進鴻溪、寺島義一(白鹿の子)など



牛麓舎跡石碑

方谷は江戸遊学時代にすでに『理財論』や『擬対策』を著し、各藩の財政困窮を目の当たりにして藩政改革や財政立て直し一般について論じていたが、帰藩後は有終館と牛麓舎で学問・教育活動に専念する日々を

送っていた。その方谷が備中松山藩の藩政改革・財政再建に深く関与する契機となったのは、藩主勝静の世子勝静の教育係に任じられたことであつた。やがて方谷は藩主となった勝静の厚い信頼と期待をうけて、藩の元締めと吟味役という重職に任じられ、阿吽の呼吸の下に大胆な藩政・財政改革を断行し成功させる。理財家としての彼の名声は幕府や他藩にも聞こえ、また勝静が幕府の奏者番や寺社奉行や老中・老中首座に補されるとともに、方谷は幕政にも関与するようになっていった。

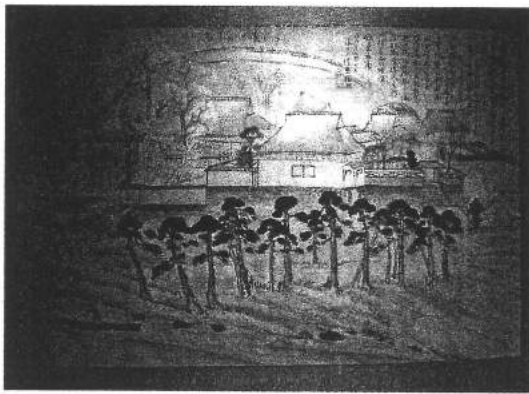
藩政における理財家としての彼の事績や幕末動乱期の行動についてはよく知られている。上下節約、負債整理、藩札刷新、産業振興、民政刷新、文武奨励など多角的な施策によって、約7年という短時日のうちに10万両の借財を返済したうえに10万両を蓄財した松山藩の財政再建は、上杉鷹山による出羽国米沢藩のそれにまさるとも評価される。国家財政破綻の危機に直面する現代のわが国において、方谷の思想や手腕が注目されるゆえんである(矢吹邦彦『ケインズに先駆けた日本人―山田方谷外伝―』と題する著書も出版されている)。また、戊辰戦争で朝敵となり備前岡山藩の追討をうけることになった時に、藩民を救うため無

血開城にこぎつけ、さらに、日光・奥州・箱館へと流転していた藩主勝静を救出しその子勝弼を立てて藩を再興する交渉にもあたった。誠と義の心を尊ぶ方谷らしい行動であった。

儒学者（陽明学者）山田方谷は藩政改革家・理財家として知られているわけだが、教育家・私塾の主宰者としての活動も顕著であり、上述の牛麓舎以外にも長瀬塾と小阪部塾という名の私塾を開いて後進の指導・育成にあたったほか、各地に教諭所や郷学を開設したり閑谷学校の再建に尽力したりするなど教育の普及・振興に努力を傾注した。その教育への情熱は、政治の世界から身を引いた晩年によりいっそう高まっていた。方谷は藩政改革の一環として文武奨励に努め、城下や玉島や総社の各地に教諭所を設けて卒（下級武士）や町民や農民にも学問を学ぶ機会を提供していたが、維新後の明治元年（1868）には、安政6（1859）年以来開塾のため移住していた長瀬に新たに私塾（長瀬塾）を開設し門弟の教育に専念した。弟子の三島中州や川田甕江を介して新政府へ出仕するようにとの要請を断つてのことであった。長瀬塾で学んだ谷 資敬（松山藩士で後に東京控訴院判事）は手記の中で長瀬塾での方谷の指導ぶりについて次のように記

している。

私が明治2年2月に入塾した時、生徒は10人ほどでしたが、先生は各人に応じた教科課程を立てられ、日々教授なさいました。半年後には50人になり、冬3カ月間は特に勉強に励むよう諭されました。朝はろうそくをともして易経を講義、朝食は粥と漬物、食後は春秋左氏伝と詩経を隔日に講義、冬の寒い日も火鉢を置かず、遺言のつもりで講義しているので長くなってもよく聞いて欲しいと言われました。



長瀬塾（絵）

長瀬塾の学規では、課業のほか起床・就寝時間や清掃、外泊などの生

活規則や休講日についても細かく定められていた。毎朝、祖先と父母に遥拝することは第一の礼であった。

方谷は藩政改革に取り組んでいた安政6（1859）年、民政刷新の一環として藩士に荒地の開墾・土着を奨励し、自らも長瀬に移住していたが（藩政にあたるため月の半分は藩主から与えられた城下の御茶屋に居住）、同年7月に越後藩士河井継之助が方谷を訪ねたのは城下とこの長瀬の居宅であった。継之助は翌万延元年（1860）年3月までの8カ月間城下の武家宿花屋（他藩の武士が泊まることを許された唯一の宿屋。長州藩の久坂玄瑞や会津藩の秋月悌次郎も宿泊）に滞在して方谷に学んだ（この間、御茶屋での寝泊まりを許され、有終館にも出入りしていたと思われる）。長瀬を去るに際し、継之助が高梁川の対岸の榎の大木（見返りの榎といわれ今も現存）の下で、方谷のいる方向に向かって数度座礼して、師と仰ぐ方谷に別れを告げたという逸話はよく知られている。

谷 資敬の手記にもあるように塾生の数が増えるにつれて長瀬塾は手狭になったので、明治3（1870）年、方谷は供養の心もあり母方の先祖の地である小阪部に移り住み、そこで小阪部塾を開設した。小

阪部には方谷に心酔していた当地の大庄屋矢吹久次郎が購入していた陣屋跡地があり、そこに塾が設けられたのである（200人収容可という）。小阪部塾でも、講義の日時と内容、教育の方法などの他、16ヶ条にわたる塾規（理由なき部屋からの退出や外出、金銭の貸し借りなどを禁止）を定めて塾生の指導にあたった。取り上げられたテキストは『論語』、『詩経』、『春秋左氏伝』、『史記』、『資治通鑑』、『日本外史』などで、教育方法としては講義、輪読、自習、質疑・問答などが採られた。

藩校有終館と私塾の牛麓舎、長瀬塾、小阪部塾に学んだ方谷の門下生の総数は計378人にのぼった。有終館では松山藩士の大半が門下生となった（藩士の修学は義務化された）が、なかには岡山藩、鴨方藩、岩国藩など他藩からの来訪者もいた。京都から来た寺島義一（方谷が京都遊学時代に師事した白鹿の子）が有終館と牛麓舎のどちらで学んだのかは定かではない。おそらく、両方に入りしていたのではないかと推察される。岡山歴史研究会に所属する山田方谷研究家の中山 亘氏が調査した「山田方谷先生 門下生姓名録」には有終館と牛麓舎を合わせて計37人の門下生の姓名・出身地が列挙されている。同じく長瀬塾に

は計88人の門下生の姓名が出身地域ごとに挙げられている。備中各郡、美作各郡の他に伯耆や備後からの塾生の名も見える。また、「長瀬及び刑部＝小坂部塾門下生」(明治3年秋から明治10年6月まで)計320人の氏名と出身地も列挙されているが、西は豊前・豊後や筑前、東は伊勢、尾張、武蔵、常陸など全国各地からやって来ている。方谷の名声が広く遠くにまで届いていた証左である。塾生には十分の者も町人・農民もいた。

方谷は陽明学の先達である熊沢蕃山がその創設に関わった岡山藩の郷校閑谷学校の再興(明治6(1873)年)にもあたり、毎年春秋に1ヶ月ほど滞在して陽明学などを講義した(明治9(1876)年まで)。その行き帰りの途次には、門下たちが開いたや知本館や温知館やといった郷学(命名は方谷)に立ち寄って講義をするなど、最後まで地域の教育発展を支援した。知本館を経て帰宅した後、慢性水腫悪化により明治10(1877)年6月26日、小坂部で没した。享年73歳であった方谷の主な著作には上記の『理財論』や『擬対策』の他、『孟子養気章講義』、『古本大学講義』、『集義和書類抄』などがある。

私が高梁(人口約30,000人)

を訪れ、リニユール・オープンして間もない山田方谷記念館や方谷ゆかりの史跡巡りをしたのは2019年5月15日であった(高梁にはそれまでに二度来たことがあった)。高梁は高梁川に沿って細長く開けた山間の町で、古い武家屋敷や商家が並ぶ通りが残っており、どこか懐かしい風情が漂う。「男はつらいよ」、「バツテリー」、「県庁の星」など、映画のロケ地として選ばれるのも分かる。「天空の城」として有名な備中松山城も観光客に人気が高い。だが、教育関係者にとって何よりも興味深いのは、この町が山田方谷ゆかりの地であり、また、北海道家庭学校を創設した社会福祉事業家留岡幸助の生誕地で、女子教育のバイオニアの一人福西志計子(方谷の弟子)が生まれ活動した土地だという点にある。豊かな教育文化遺産に恵まれた町なのである。一方、モダンで革新的なところもあって、鉄道駅に隣接して建てられている市の図書館は、蔦屋書店やスターバックスと一体化した構造になっており印象的であった。

私が記念館を訪ねた時には他に来訪者はなく、独りで展示物を見学していると、年配の紳士がさりげなく寄り添ってきて詳しく説明をしてくださったのだが、聞けばその方は方

谷の子孫(方谷から数えて5代目)にあたるということであった。後で調べてみると、私が訪ねた約1ヶ月前には藩主家19代当主板倉重徳氏が初めて記念館を訪れ、方谷の子孫の山田敦館長から親しく説明を受けたという。私は幸運にも藩主並みの厚遇に与ったのであった。高梁市ではNHKの大河ドラマで山田方谷をとりあげるようにとのキャンペーンを行っており、私もその署名簿に名前を記して高梁を後にした。

IV 池田草庵と立誠舎・青蹊書院

山田方谷に遅れること5年の文化10(1813)年、但馬国宿南村の組頭をつとめる農家の3男として、もう一人聖人(但馬聖人)と呼ばれることになる池田草庵が誕生した。幼名を歌蔵、通称禎蔵と言う。10歳で母を亡くし(12歳の時に父も亡くす)、翌年の文政6(1823)年、「但馬高野」と呼ばれた広谷村の満福寺に入って僧となり、住職の不慮上人に愛育されながら修行を続けた。しかし17歳の時に大坂から招かれて来訪し、満福寺などに寄寓して近在の篤学の有志たちに儒学を講じた新進気鋭の儒学者相馬九方と出会ったのを契機に儒学への志向をかめ、ついに満福寺を出奔・還俗し

て京都の相馬九方の塾に入門した。19歳であった。相馬塾(立誠堂)では学僕としての務めを果たしながら苦学し、やがて塾頭に補されるようになる。後に草庵は満福寺を出奔した不義理な行動を深く反省して絵師に「満福寺出奔図」を描かせ、掛け軸にして自らの戒めにしたという(後に不慮上人に詫びて許されている)。



池田草庵座像(木像)

相馬塾に学んでいた頃(21歳)、草庵は生涯の友となる陽明学者の春日潜庵と出会って大いに啓発される。彼は潜庵の世話で洛西梅宮、松尾山山麓の西山へと居を移し、24歳の時に西山に庵を結んで読書・思索に専心する生活を送った。草庵と号するようになったのはこの頃からである。そして天保11(1840)年、28歳の時に春日潜庵の居宅に近い一条烏丸西に小さな私塾(池田塾)を開いた。江戸から広島に帰る

途中の吉村秋陽（陽明学者で佐藤一斎の高弟、広島藩家老）と知り合ったのも京都においてであった。山田方谷とも出会っている。

草庵は京都遊学中に、墓参して両親を追慕するためなど五たび但馬に帰り、故郷とのつながりを大事にしていたが、ある時の帰郷中に、豊岡藩家老（舟木子新）の招きで豊岡に20日間ほど滞在し、そこで藩士たちに講義したこともあった。草庵の儒者（陽明学者）としての名声は郷里の人々にも知られるところとなっていた。やがて草庵は天保14（1843）年、人々の熱心な勧めに応じて八鹿村に帰り、地方の旧家で大庄屋の西村潜堂が開きそこで石門心学を教えていた立誠舎の後を承けて新たに漢学塾を開くこととなった。当初15人であった門人は翌年には35人というように毎年増えていった。草庵は遠方からの入門者の便宜をはかって敷地内に時習寮という名の寮も建てている。立誠舎時代4年間を通じて計62人が入門したが、その中には但馬外からの塾生も8人いた。ここで学んだ門人には安積樂之助（理一郎）、国屋松軒、北垣国道（晋太郎）などがある。

要性も深く認識していた。京都遊学後の立誠舎時代には、数名の門人を伴って近藤篤山（伊予国小松藩）、林良斎（讃岐多度津藩）、吉村秋陽（芸州広島藩）、山田方谷（備中松山藩）、春日潜庵（京都）などの師友を訪ねる大旅行を行った。潜庵、良斎、秋陽とは生涯を通じて深い交友を結んでいる。またその後（青蹊書院時代の39歳の時）も江戸に佐藤一斎を訪ねてその講筵に列し、高弟の大橋訥庵と交遊している。弘化4（1847）年（35歳）の時に、草庵は故郷宿南村に私塾「青蹊書院」を開いて立誠舎から移り（この頃結婚）、以後明治11（1878）年に66歳で亡くなるまで32年間にわたって子弟の教育に専念した。この前後、豊岡藩や宇都宮藩から藩儒として仕官するようにとの要請もあったが、草庵はそれらを辞退し、郷里の私塾で活動することを望んだのであった。青蹊書院は草庵の甥の池田盛之助（後継者と目されるも若くして病没）が中心となって奔走し建設したもので、青山川の谷あい位置するところからそのように命名された。草庵はここを生涯の「終身読書・優游自適」の場として、「学んデ厭ハズ、人ヲ誨エテ倦マズ」（「論語」）の生活を送ったのである。「慎独」（独りを慎む）、「兀

座静黙」（静座しての自己反省）は草庵が身をもって門弟たちに示した教えであった。「草庵文集」、「草庵詩集」、「肄業余稿」、「読易録」、「古本大学略解」などの草庵の著作はこうした生活の中で著わされたものであった。



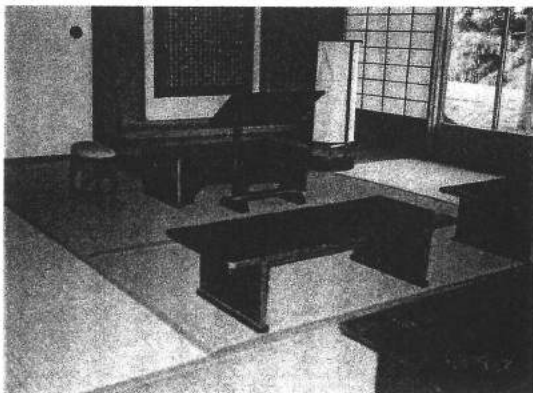
青蹊書院（塾舎）

青蹊書院での草庵の起居、読書・講義、塾生指導の様子などについては、草庵の最初の伝記である豊田小八郎「但馬聖人池田草庵先生伝」（明治40年）に詳しく記されており、以下、その中から抄出しながらみてみよう。

書を講ぜらるには、少しも弁舌を弄し辞令を飾らることなく、極めて平々淡々なれども、

其の滋味限りなく、而も意義明暢たり。要義の処に到る毎に大声疾呼し、滾々として舍かず。聴く者肺腑に透徹するを覚え、悦服感嘆せざるはなし。

学級としては睨と設けられず。唯学力略ぼ等しき者を聚め教授せらる。故に人数多き組は数十人に及び、少きは数人なり。学力性癖特異のものには、一人二人のために特に開講せらる。又己が所属以外の講義を聴かんと欲するものには、随意に列席するをゆるさる。：各生毎日午前午後一回づつ業を受く。：弱年の輩には、年長の学生をして句読を授けしめらる。



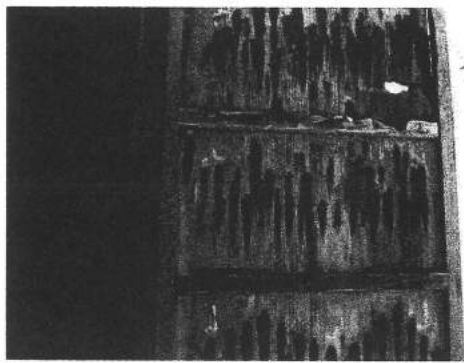
青蹊書院（講義の間）

草庵の講義は明快にして魅力に富み、また各人の個性・能力に応じた柔軟かつ自由なものであったことが推察されよう。テキストには、初学者用としては『小学』、『大学』、『論語』、『孟子』、『中庸』、『十八史略』、『近思録』、『伝習録』など、上級者用としては『易経』、『詩経』、『書経』、『左伝』、『唐宋八家文』などが随時用いられた。

塾の生活は質素で、「毎日常朝は撃拆にて起床し、夜は亥刻（10時）に寝ぬるが常なり。朝起の後、夜寝の前には一同揃いて先生の前に出でて挨拶をなす。」とあるように規則正しいものであった。「寄宿生最も多きときは60人を踰ゆ。各室の中、年長者を推して室長とし、諸事の取締をなさしむ。塾頭といふべき者は別に置かれ」なかつたともある。簡単な塾規は定められていたが、「規律自ら立ち、塾舎清浄にして一塵なく、諸生の坐臥動静、整然紊れず、而も和氣藹々たりき。」という風であった。

青蹊書院に学んだ者の数は31年間で計611人を数えた。立誠舎時代の62人とあわせ、総計673人が草庵の下で学んだわけだが、その出身地は但馬内383人、但馬外283人、不明7人と広く全国各地に及んだ。武士では但馬豊岡藩をはじめ遠

くは常陸水戸藩、下野宇都宮藩、肥後人吉藩など34藩から、また、農民・町民では但馬はもちろん美濃、尾張、豊前、周防、伯耆など32か国から学生が参集した。青蹊書院の門弟の中からは北垣国道（京都府知事として琵琶湖疎水を完成させる。北海道庁長官）、原六郎（横浜正金銀行頭取）、久保田謙（広島師範学校初代校長、文部大臣）、吉村寅太郎（第二高等学校初代校長）、浜尾新（東京帝国大学総長、文部大臣）、河本重次郎（日本近代眼科の父）、日置黙仙（曹洞宗永平寺管長）など明治の各界で活躍する人材が輩出した。



青蹊書院
（門人用便所の戸板に残るろうそくの焦げ跡）

私が養父市八鹿町（町の人口は約12,000人で市の人口は約2

3,500人）を訪れたのは平成31（2019）年1月7日であった。山陰本線の八鹿駅は特急の停車駅であるが、駅周辺には店もほとんどなくバスの便も不便で、レンタサイクルもなかった。私はタクシーで青蹊書院（母屋は宿舎と客間・講堂を兼ねた木造茅葺の建物、兵庫県指定史跡）に向かった。当時の趣をほぼそのまま残す塾舎を目の当たりにして、私はしばし感慨に耽った。とりわけ、皆が就寝した後さらに勉強しようとして、塾生のある者は戸外に設けられた門人用の便所に行つて読書したというが、入り口の戸板に残る灯り用のろうそくの焦げ跡は強く印象に残った。その後、私は付近にある青蹊書院資料館（その蔵書は兵庫県指定文化財）を見学し、またタクシーで駅を経由して立誠舎を目指した。案内してくださった八鹿自治協議会の担当者によれば、立誠舎は近年復元・整備され、今日、「平成の寺子屋」として活用されているとのことであった。一方、青蹊書院の塾舎は老朽化によりあちこち傷んでいるところも多く、私は早急に修復・保存の手だてが講じられるようにと願いつつ八鹿を後にした。

おわりに — 遺産の保存・継承と活用 —

以上、本稿ではわが国の教育史跡・教育文化遺産のうち、近世の3人の聖人とその私塾である中江藤樹と藤樹書院、山田方谷と牛麓舎・長瀬塾・小坂部塾、池田草庵と立誠舎・青蹊書院について、実地の見聞を交えながら紹介を試みた。3人はいずれも農民出身の儒学者で、朱子学とともに陽明学に深く傾倒した人物であった。彼らは自らの出身地に私塾（漢学塾）を開いて、武士や農民・町民の身分を問わず門弟の教育にあたった。近在はもとより全国各地から参集した塾生に対して、その能力・個性に応じた自由で柔軟な教育を施し、有為の人材を多く育成した。私塾においてのみならず、自藩の藩校でも教えたし、また他藩に向いて教えることもあった。彼らは遊学し、文通・交流などを通じて相互に啓発しあつたが、その範囲は大きく広がっていた。

各藩が割拠し封建的身分秩序が厳しかった江戸時代、江戸や京都や大坂のみならず全国各地に藩校や私塾など多様な学びの場があり、一定の知のネットワークが張り巡らされていた。中央だけでなくそれぞれの地方・地域にも「学問の府」が確固と

して存在し、交通はそれ程発達していなかったけれども、各地から多くの学生を惹き寄せていたのである。

そうした各地に残る学問・教育の遺跡（教育文化遺産）を訪ね、足で歩いて目で見、肌で感じることは、往古の姿・様子に思いを馳せ、現在と未来の学問・教育のあり方について考える何よりの手がかりになる。

少子高齢化による地域の衰退が喫緊の課題となり、地域振興・活性化の方策が急がれる中、教育史跡・教育文化遺産の活用がもつとはかられてよいのではないかと思う。グローバル人材の育成とか情報化社会への対応が教育のメインテーマとして関心を集めているが、その一方で人間教育を追求した過去の教育実践にももつと目がむけられるべきではないかと愚考する。かつてイギリスの大学史家H. ラシユドールが述べたように、「教育においても、ほかの場合と同様、過去に関する知識は、現在の実際的な知恵の一つの条件なのである。」ただし、「歴史の教訓が、形式的な推論や教訓的な説明を許容することは、稀」なのであり、とりわけ、儒者や彼らが主宰した私塾を取り挙げる際には、為政者や道学者たちの手垢がついた「道德教育」とは一線を画しつつ論じていくことが肝要となる。教育文化遺産の保存・

継承・活用にあたっては、復古主義や時代錯誤に陥らず、また短絡的・ご都合主義的な現代的解釈に奔ることなく、正確な実像に基づいて将来展望のてがかりとすることが求められよう。

主要参考文献

- ・海原 徹『学校』（日本史小百科15）、近藤出版社、1979年。
- ・海原 徹『近世私塾の研究』思文閣出版、1983年。
- ・内村鑑三著、鈴木俊郎訳『代表的日本人』岩波文庫、1941年。
- ・木南卓一『中江藤樹私新抄』明德出版社、2008年。
- ・木南卓一『池田草庵先生―生涯とその精神―』（私家版）、2013年（再版）。
- ・児玉 亨「方谷先生を訪ねて」『広報たかはし』2005年4月号～同年8月号、高梁市秘書広報課。
- ・児玉 亨「山田方谷を語る」『広報たかはし』2013年12月号～2014年12月号、高梁市秘書広報課。
- ・R・P・ドーア著、松居弘道訳『江戸時代の教育』岩波書店、1970年。
- ・奈良本辰也編『日本の私塾』角川

文庫、1974年。

・日本生活文化史学会編『塾と学校―学びの再発見』（生活文化史7）、雄山閣、1985年。

・山井 湧・山下龍二他編『中江藤樹』（日本思想体系29）、岩波書店、1974年。

・矢吹邦彦『炎の陽明学―山田方谷伝―』明德出版社、1996年。

・山住正己『中江藤樹』（朝日評伝選）、朝日新聞社、1977年。

・R・ルビンジャー著、石附 実・海原 徹訳『私塾―近代日本を拓いたプライベート・アカデミー』サイマル出版会、1982年。

・その他、藤樹書院、中江藤樹記念館、藤樹神社、山田方谷記念館、立誠舎、青蹊書院に関する当該機関や地元自治体発行のパンフレット・リーフレットや地図。